

高橋宏幸先生のラテン文学研究から学んだこと

西井 奨

私は2004年の学部3年生の時に京都大学文学部の西洋古典学専修に所属し、その後、学部2年間・修士課程2年間・博士課程3年間、そして課程博士の学位論文を仕上げるまでさらに3年間、高橋宏幸先生のもとでラテン文学研究の仕方を学び、時に厳しく、時に暖かくご指導を受けてきました。高橋先生は特殊講義の授業では毎回必ず、ご自身の研究ノートのような形での資料を配布され、そこから私は、先生のラテン文学・西洋古典学の研究に取り込まれる真摯な姿勢を拝見し続けてきました。今、自分がラテン語やラテン文学を教える立場になって、高橋先生ほどの準備がなかなかできないことに、やはり自分は弟子だと言っても不肖の弟子であることを実感する次第です。

高橋先生が書かれる論文は素晴らしいものだ、という主旨のことを、文学部開講のラテン語4時間コースで私がラテン語の初歩を学んだ山下太郎先生が言っておられたのをよく記憶しております。私はそれで高橋先生の書かれた論文や、また高橋先生が師事なさっていた岡道男先生の論文を何度も読み、その研究手法を我が物にしようと意識してきました（もちろん高橋先生の域には未だに全く達していないと自覚することばかりです）。そして何とかこの『西洋古典論集』に論文を載せようとして、修士課程や博士課程に在籍していた頃から、高橋先生に私の書いた論文（のようなもの）を何度も見て頂いておりましたが、いかに自分の研究（のようなもの）が稚拙であるか、その的確なご指摘から実感することばかりでした（それで結局『西洋古典論集』には未だ論文を載せることができず、この高橋先生の退官記念号にも恥ずかしながら論文を投稿することすらできなくて、不肖の弟子として身が振れるような思いです）。

高橋先生は、「良い問題提起ができれば論文は半分完成したも同然」「適切な“補助線”を引くことができれば良い論文になる」というようなことをよく仰っていたように記憶しております。そのような高橋先生の論文の中で、私がよく読み返すのが、『西洋古典学研究』44(1996)所収の「ケパルスの物語：オウィディウス『変身物語』第七巻661-865行」です。この論文では、クレタのミノスによるアテナイ侵攻に際しアテナイの老将軍ケパルスが援軍を求めアイギナに立ち寄った折に、かつての妻プロクリスとの思い出を語るという『変身物語』中のエピソードについて、そのエピソード中の「槍についての矛盾」に関してなぜそのような矛盾が起きているかを「ケパルスの意図」から解明するものとなっています。ここで高橋先生は、「妻プロクリスの死後の変身（槍に彼女の魂が乗り移ったかのように、投げた後に自動でケパルスの手に戻ってくる）」という結末場面

の物語が描かれていれば、そのような「槍の矛盾」は解消されるという“補助線”を引き、そしてそのように描かれていないのはなぜか、として論を展開なさっていきます。「矛盾はあるがその矛盾は作者のミスではなく作者の意図的なものであるはずだ」という問題提起をし、「こう描かれていれば矛盾の無い自然なものとなる」という“補助線”を引く。この議論の展開の仕方は、西洋古典文学研究の一つの範として、自分が研究を進める際にいつも思い起こすようにしております（現在、大学で私自身が学生たちに論文の書き方を教える際にも、ほぼ毎年この論文を使わせて頂いています）。

また高橋先生は、「ラテン文学を研究するなら、恋愛エレゲイア詩の研究から入るのが取り組みやすい」ということも仰っていたように思います。高橋先生ご自身も、恋愛エレゲイア詩の代表的詩人のプロペルティウスの詩の研究から本格的な研究をスタートしておられます（1980年度の修士学位論文は「Propertiusにおける「死」」というタイトルのようです。また1984年から1988年にかけて4本の研究論文を学術雑誌に発表されています。また世界思想社の『ラテン文学を学ぶ人のために』でもプロペルティウスの項目執筆をされています）。私は学生の頃から、オウィディウスの初期のエレゲイア詩形式の作品でありローマ恋愛エレゲイア詩の伝統の下にある『ヘーローイデス』を研究対象として卒論・修論・博論と書いてきましたが、それも高橋先生のこのような言葉があったからこそというものもあります（高橋先生の授業で読んだ作品だからというものもありますが）。この『ヘーローイデス』については、単独書簡15編中のうち何編かを、高橋先生は私に翻訳するよう仰せられ、そして高橋先生と共訳の形で出版するというお話が随分前からあったのですが、これまた私の不甲斐なさぶりを発揮してしまうこととなり、翻訳をお渡しすることができないまま時間ばかり経ってしまって、結局、高橋先生はご自身の単独訳で平凡社ライブラリーから『ヘーローイデス』の翻訳を出されました（2020年1月）。せっかくの高橋先生との共訳の機会を私は駄目にしてしまったわけですが、その高橋先生の翻訳の巻末の解説では、私の博論にも言及していただいております、嬉しいような申し訳ないような歯がゆい気持ちになったものでした。

オウィディウス『ヘーローイデス』というと「書簡」というジャンル性も有していますが、高橋先生のこれまでのラテン文学研究の中で「書簡」への関心は強くあったように思われます。それは高橋先生が編著を務められた『はじめて学ぶラテン文学史』でも、「書簡文学」の項を設けられ、高橋先生ご自身が執筆されていることから伺えます。岩波文庫版のキケロー書簡集の翻訳と編著、セネカの倫理書簡集の翻訳（岩波版のセネカ哲学全集5に所収）、ホラーティウス『書簡詩』の翻訳（講談社学術文庫）も、高橋先生のような書簡への関心の深さに基づくように感じられます。思えば、『ヘーローイデス』の特徴たる「女性から男性へのエレゲイア詩形式での手紙」はプロペルティウス第4巻第3歌に端を発することになりますが、高橋先生がプロペルティウスを主に研究されていた若かりし頃から、ラテン文学における書簡というジャンルへの関心を持って

おられたのかかもしれません。私は『ヘーローイデス』で長年研究を続けてきたこともあり、高橋先生による書簡ジャンルに関係する記述については、見落とすことのないよう収集してきました。

高橋先生のラテン文学研究の集大成は、2010年1月に京都大学に提出された論文博士の博士学位論文「オウィディウスの神話語り——手違いの詩歌——」にあります。当時博士課程在籍中だった私は、電子データで高橋先生の博士学位論文を頂きました。それを読み込み、「たとえ自分はこれほどのものは書けないとしても、これに近付けるような課程博士論文を書き上げるぞ」と意気込んだものでした。それで博士課程3年+課程博士論文提出資格取得後の期限3年を使い切って何とか書き上げましたが、最後の1年間の後半は、高橋先生にご心配をおかけするようなことばかりだったように思います。さらに私は図々しくも、提出後何年かしてから、京都大学の「優秀な課程博士論文の出版助成制度」で私の博論を出版できるよう高橋先生に推薦して頂けないか（それも自身の博論を提出時からほとんど修正せずに）お願いに行ったことがあるのですが、「これは“優秀な”課程博士論文を推薦するものだからね」と言われて、推薦をお断りされました。それは今思えば私のためでもあり、日本の西洋古典学の学問水準のためでもあったと感じられます（ちなみに私の後輩にあたり、同じくラティニストで高橋先生から指導を受けた竹下哲文さんは、この出版助成制度でご自身の博士論文を京都大学学術出版会から出版していますので、もしかしたらこの高橋先生の研究について書く項目は竹下さんが書くのが適任だったかもしれません）。

さて、ここには書ききれませんが、高橋先生の研究業績には、キケローやプロペルティウスやホラーティウスやオウィディウスやセネカ哲学に関するもののみならず、ローマ喜劇やカエサルやウェルギリウスやリーウィウスやセネカ悲劇に関するものもあります。私は高橋先生の不肖の弟子として、これらの高橋先生の研究に助けられながら、これからも高橋先生からのご恩を感じながらラテン文学研究者として研究を続けていければ幸いです。高橋先生、本当にありがとうございました。